自蹊庵便り

令和七年　文月

NO 175

～茶事折々～

自蹊庵便りも百七十五号を迎えます。一年六回として、約三十年近くなります。初めてのテレビ放送での茶事行脚が五十六歳でした。全国茶事行脚をしながら帰宅しますと、沢山の礼状が届いておりました。

お一人お一人、お返事を書くのが容易でなく、こちらから全国の皆様に通信物を送らせて頂くことになったのが、今に続いております。初めはお便りに一筆走り書きの礼状を添えさせて頂くだけでしたが、十年ほど過ぎた頃から、全国行脚もなかなか厳しくなってきたため、懐石の献立も皆様にお送りするようになり、托鉢の行脚も道楽ではく、茶事専門の出仕事屋としての仕事に追われ、毎月のお便りが二月に一度になり、今ではそれも滞りがちにて、ヤマトのメール便が廃止になったことで更に拍車がかかり、このところ遅ればせの便りが続いております。あしからずお許しくださいませ。

おおよそのものがスマホで間に合う時代、一筆メッセージももう不要なのかも…とよぎりつつもやはり書かずにはいられない…。お元気ですか・お変わりないですか、…の一言でも、それを書き続けているだけで、五年、十年とお逢いしていなくても、再会の折は昨日逢ったばかりのように交わえる不思議さがあります。

非生産性この上ない自蹊庵便りもきっとこときれるまで書き続けているような気がしますが。いえいえこれは長年陰で支え続けて事務局を引き受けてくださっているN氏の下支えなくしては続けてこられなかったことにございます。N氏を始め多くの方々の下支えあっての今にございます。

百号になったら本にしなさいと云ってくれていた高校でお世話になった国語の恩師も逝ってしまわれました。毎号欠かさず葉書でコメントを寄せてくださり、その評たるや蘊蓄のぎゅっと詰まった哲学文にございました。その葉書の少ない言葉のきりっとしたセンスに、これは是非とも本にするときは、先生との往復書簡として一冊にまとめたい…と心温めておりましたが、それもかなわず逝かれてしまいました。

私が八十を越えているのですから、当然恩師と呼べる方々はさらさらと指から水がこぼれ落ちるように、誠にさらさら　さらさらと…。以前にも書かせて頂いたかと思いますが、いつも身に染みて思うのです。財産とは、後を振り向いて聴いてみたいと、問いたいと思うことが、

もう聴くことができない、これ以上の宝はないのです。それがぼろぼろとこぼれ落ちていきます。まるで留まることを知らない川の流れのように…。

五十年前、一つの選択肢として料理の道を選んだのは、息をひきとるまで食べ物をを口に運び続ける、人間さんは口から確かなものを運ぶことで命は刷新されるという、単純明快な答えが目の前にあったからです。お人を元気にする源水であること、そして今一つは、お人とお人を結ぶ大きな力を宿しているということ。その二つをやり続け、削ぎ落していった先は、気がつけば茶事という世界のみ残っておりました。

やり続けてみる。何事もやり続けてみなければ見えるものも見えず、やり続けていれば何か見えてくるものもあるやもしれず…と、八十二歳になった今もまだまだ何も見えていないに等しく、目くら蛇に怖じずの五十代、恥拾いの六十代、そして七十～八十と先人の真似事をやり続けてきました。

答えを求めているのではなく、今日一日を余念無く生きる、という世界を求め続けてきたに過ぎませんが、これには誠に茶事の世界は相応しゆうございます。

なぜならば、雑念を抱く隙間を与えてくれないといいますか、只々段取りと片付け、明けても暮れても段取りと片付け、至福の一服のために心と体を使い尽くす…といいますか、使い果たす！そのような起き伏しが雑念の隙間を塞いでくれているのかもしれません。

京都教室では、かれこれ十年を超えている人も少なくありません。私が八十二歳ということは、通われている方々も皆さん齢を重ねてこられているということです。皆様のお身内の背景がじわじわと変化してきております。御両親の介護が必要な方々、御主人様の停年、健康面、精神面、時々刻々と背景が様変わりしてきております。そこに長年にわたる経済の疲弊に四年間にわたるコロナの追い打ち、そのような日々の只中にありながら自分の老いとも向き合う、多難なことにございます。

だからこその束の間の一服の清涼剤なる時を求めてやまないという背中合わせなのではないのでしょうか…。

そのような折々の容赦なきこの物価の高騰、心痛む追い打ちにございます。

皆々慎ましく始末できるところは始末し、極上のひとときに心を砕ききりたいと願っております。

長きにわたりお通いくださっている皆様の背景もおひとりお一人が抱えている御苦労は違うと思いますが、お力になれることも微々たるものにございますが、はっきり言えますことは、皆様それぞれ素晴らしい力をお持ちです。御自分を信じて思うところを歩んでほしいと思う

のです。

そして大切なことは、皆様には限りなく素敵なお仲間がおられ、この十年でそれぞれが確かな力をつけ、信頼しあい、助け合うという尊い心の分かち合いが身についているということです。

答えを求めずとも茶の湯の世界を茶事という世界をやり続けてこられて培われた人間力というものに一層磨きがかかっているのを感じております。

灰と炭をとの息遣い、お点前、所作の息遣い、懐石の素材の命と向き合う息遣い、暁・朝茶・夕ざり・夜咄と、蝋燭一つの火のつけよう、水の撒きよう一つも季節に合った息づかい、心映えのいることにございます。

それらの年月は、心の充電期間でもあります。物理的不都合が生じた折には、充電して蓄えてきたものを小出しにしながら、目の前の物事に誠実に向き合う。限りあるなかの更に限られた束の間の一服が極上の心の充電となりますよう。努力し、時を紡いできた足跡に自信と誇りを持ってほしいと願っております。

それぞれがまずは御自分の健康管理を、そして大切な御家族と向き合うときは、しっかりと向き合う。必要な時間を求めていれば、神様は必ず目の間に訪れます。私達はみな奇跡の中に生かされている　あやうい命ですが、だからこそ今日一日の賜った命を、自分を信じて思うところを余念なく生きる、振り向けばいともと変わらぬ笑顔に会える、良き仲間がそこにいる。皆様がすごし、育ててきたまなびやは、そういう場場所です。

ここに江崎玲於奈氏九十五歳のとき書かれた人生のシナリオという一文を載せて、まなびやの皆様へのエールとします。

「人生のシナリオ」

人間の一生とは、自分が主役を演ずるドラマ

〇年齢に応じ、能力が最大限に発揮できるシナリオを創作し、それに従って活動する。〇シナリオに書かれていない「チャンスの女神」微笑みに出会えば、一大好機、的確に捉え、自分のものとする。それが成功の秘訣。

〇いつまでも初々しい感情を飽くことなき好奇心。

君はわが運命

厳しき夏の予感、皆様くれぐれも御自愛くださいますよう！

You are my destiny（君はわが運命）